

おーいお茶みたいに妻を呼ぶ声帯

まちりこ

埼玉県

呼んでいるのは主体自身なのに、なんとも他人事である。商品名とまったく同じように妻に対してお茶を要求したところで気が付いたのだろう。ふと我に返った気まずさをごまかすために、「みたいに」と自分から遠ざけあくまでも「声帯」が言ったのだという悪あがきをする。

ここは生き狂いの街だね、と

青いまま落ちた

君の中身が染みついた

ワンルーム

浅葱

愛知県

どこから「落ちた」のだろう。しかも「青いまま」。私たちは生きている間、染まらざるを得ない場をいくつも抱える。けれど、「染まれない」というのはそれ以上に苦しいのかもしれない。君が落ちた時の中身がぶちまけられたような青いワンルーム。何もかもそのままです、少しずつ褪せていく。

帯電の身体で泳ぐあおみどり

中矢 温

愛媛県

帯電しているときの身体はふわふわしていて、臓器や骨や肉にすぎ間が生まれたような居心地の悪さがある。おそらく「あおみどり」に生命はない。けれど体内を泳ぎ回り、よりいっそうすぎ間を拡げていく。あおみどりが泳いだあとは、少しだけ発光しているかもしれない。

もう会えない

人がいるっていいことよ、と

祖母は巨峰を剥きながら言う

あお

奈良県

巨峰は皮を剥いて食べるものだけれど、この時は実から違うものが顔を覗かせそうな恐ろしさがある。実物に触れられないというのは、どこまでも自身の空想が磨かれていくという

こと。たとえば本物の欠片がなくなっても、自身の糧にできてしまう。美しい果皮の内側の暗がり。

ピアノカをファンと鳴らせよ

惜しみなく

大人になってもきみはひとりだ

マズルカ 山口県

子供の頃に孤独を知ってしまった人の時間は長い。「大人になったら世界は広がる…」なんて言葉をついかけてしまふけれど、子供でも大人になっても、目の前の孤独を一瞬だけかき消すことを繰り返して生きていくだけである。惜しみなく鳴らされたピアノカの音が汽笛のようで、ひと時だけその音にのみ心を傾ける。

味のしない涙を

ぼてぼて落としても

父の血圧はまだまだ高い

小川いなせ 神奈川県

涙の塩辛さまでなくなるほどの食事制限はさぞ辛いだろう。「ぼてぼて」という油分や感情が含まれたような重たい落下音。身体から塩分が抜けるほどの食事制限、言葉にならない感情がさらに身体から油分となって流れ出る。それでも「まだまだ」終わりは見えない。背景がある言葉たち。

神話にはない

しゅうえんを抱いている

熟れたぶらむのような しんぞう

さいう 愛知県

生身の身体を持って、傷ついてしか紡げない物語がある。私たちは痛みと引き換えの物語を啜るように生きている。「しんぞう」は初めからみずみずしさはなく、端から崩れ落ちるように滴りながら生きていく。平仮名表記によって「ぶらむ」と「しんぞう」の生々しい赤の手触りを感じる。

歌わなくていい

踊らなくていい

回ればいい

車輪は安心した

静屋 はろう 東京都

現代に生きる私たちはどの場面でも多くのことを求められる。息も絶え絶えにそれらをこなしていくけれど、そう感じるのは人間だけではなかった。物語の語り口のような「車輪は安心した」にはあらゆる立場の人間の願いも込められている。

歩いてた時の母だけ秋の浜

詩央えみる 大阪府

「歩いてた時の母だけ」に用意されていた秋の浜。歩けなくなつた今、浜は目の前からなくなつてしまつた。存在に変わりはないはずなのに、歩けないという心が目の前の浜を消してゆくのである。もう届かないほど遠くで歩いていたときの記憶が母の形をして浜を歩いている。

パーカーが回る

晴れた朝が揺れる

さつき見た夢の続き

現人 東京都

「朝が揺れる」という感覚が面白い。風に吹かれて回っているのはパーカーだけけれど、本当は空が揺れることに付随してゆらめいているのかも。生命をあやすような、この世の優しい揺れに身を任せる。まだ夢を見ている心地で、目を開けている。